

代表的パーソナリティ障害の特徴にみられる オーバーラップと独自性の背景要因の検討 ～愛着スタイルの観点から～

The background factors of overlap and originality of typical personality disorder
～From the point of view of attachment style～

山口 千晴
Chiharu Yamaguchi

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：パーソナリティ障害，愛着スタイル，自己表象，対象表象

Key words : Personality disorder, Attachment style, Self-representation, Other-representation

1. 目的

パーソナリティ障害（以下 PD）はありふれた精神障害であり，その有病率は一般人口において平均 11% に上るとされている。しかし従来のカテゴリカル方式に基づく PD の概念においては，複数の異なる PD の併存が頻繁にみられることや，同じ PD と診断される人々の間の相違が著しいなどの問題により概念自体の妥当性に疑問が呈されてきた（井上，2016）。そこで DSM-5 では上記のような問題点に対応するものとして，パーソナリティ機能（構成要素：自己，対人関係）の障害および病的パーソナリティ特性によって特徴づけられる，PD の代替モデルがその第 III 部に示された。この代替 DSM-5 モデルによって，従来のカテゴリカル方式では拾い上げられなかった臨床的に重要なパーソナリティの特徴を周到に把握できる意義は大きいとされている。では，これらの臨床的に重要なパーソナリティの特徴はどのようにして形成されていくのだろうか。

金政ら（2003）によると，Bowlby（1973/2000）は早期（乳幼児・幼児期）における愛着関係発達過程にある子どもの様々なパーソナリティや社会的能力に多大な影響を及ぼすと述べている。市川ら（2016）の研究では，成人愛着スタイル尺度の下位因子である見捨てられ不安と親密性の回避が複数の PD と関連していることが明らかになった。さらに山口（2017）の卒業論文においては複数の不安定な成人愛着スタイルが境界性・回避性 PD 傾向に影響を及ぼしていることが明らか

になった。

Masterson（2000/2007）は PD の診断のための発達の・自己・対象関係的アプローチを提唱した。このアプローチにおいては PD ごとに固有の自己表象と対象表象，およびすべての PD に共通した見捨てられ抑うつという感情が示されている。そしてこの自己表象と対象表象はそれぞれ，代替 DSM-5 モデルに示されているパーソナリティ機能の構成要素である，自己と対人関係との関連があると捉えられるだろう。

佐々木ら（2003）によると，愛着対象の表象モデルについては既に 1969 年より Bowlby が「内的ワーキングモデル（Internal Working Model : IWM）」と呼び，IWM は生涯にわたって個人の他者や世界との関わり方に影響を及ぼすと述べているとともに，自己についての IWM と愛着対象についての IWM は補完的に構築されることを Bowlby は指摘しているとも述べている。

以上のことより，①代表的 PD の特徴にみられるオーバーラップの背景要因として，「見捨てられる」ことにまつわる感情の存在を探索すること，②独自性の背景要因として，愛着表象の測定法である Adult Attachment Interview（AAI）を参考に自己と他者に対する内的ワーキングモデル，すなわち自己表象と対象表象を確認することを目的とした。

2. 方法

研究 1：研究実施責任者および研究協力者の有する SNS アカウント，および直接の依頼によって

Web上の質問紙回答を募った。回答時間は20分程度であった。質問紙の構成は以下の通りである。

表1 質問紙の構成

設問1	相談歴の有無
設問2	一般他者版成人愛着スタイル尺度 (中尾・加藤, 2004b)(7件法)
設問3	境界性パーソナリティ障害傾向尺度 (市川・望月, 2013) (5件法)
設問4	自己愛的人格項目群 (相澤, 2002) のうち、対人過敏因子、権威的操作因子、自己愛的憤怒因子の22項目 (5件法)
設問5	回避性パーソナリティ障害傾向尺度 (市川・望月, 2013) (5件法)
設問6	フェイスシート (年齢・性別)

研究2：研究実施責任者および研究協力者の有するSNSアカウントにて、専門機関への通院歴または相談歴があり、PDを指摘されたことがある、または自分自身で該当すると考えているインタビュー協力者を募り、AAIを参考にした半構造化インタビューを1時間程度行った。

3. 結果と考察

研究1：一般他者版成人愛着スタイル尺度を独立変数、境界性・自己愛性・回避性PD傾向尺度を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、見捨てられ不安は3つ全てのPD傾向尺度合計得点に正の影響を及ぼしていること、親密性の回避は自己愛性・回避性PD傾向尺度合計得点に正の影響を及ぼしていることが明らかになった(図1)

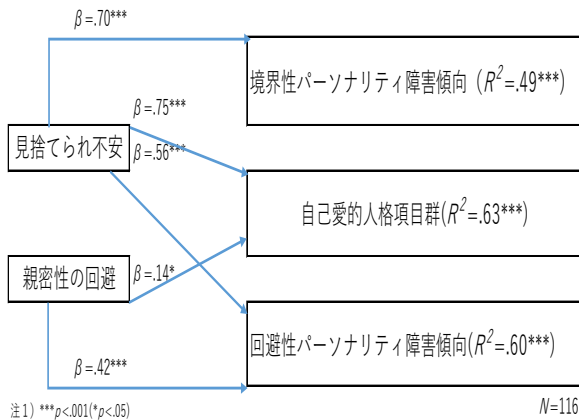


図1 見捨てられ不安と親密性の回避が及ぼす影響

研究2：各PD間で共通する感情および養育者との関わりの主要なエピソードが語られたとともに、特定のPDに固有の自己表象、対象表象、および養育者との関わりの主要なエピソードがそれぞれ語られた(図2)。さらに、インタビュー協力者らは共通して養育者との間で築くことができなかった情緒的繋がりや理解されることを求めており、カウンセラーや重要な他者との関わりを通じて生じた考え方や行動の変化、カウンセリングを中断するに至った不満をも語った。

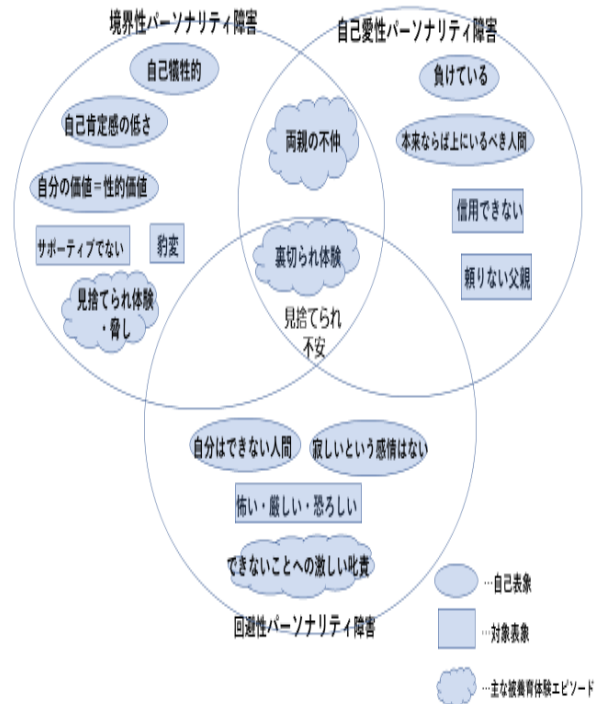


図2 各PDごとの表象とエピソード

4. まとめと今後の課題

本研究では境界性・自己愛性・回避性PDのオーバーラップの背景要因として見捨てられ不安という感情が、独自性の背景要因としてそれぞれの自己表象と対象表象が示された。少数事例のため一般化することは妥当ではないといえるが、行動レベルに留まらず、より内的な側面からクライアントの体験や社会生活における困難を理解する一助となりうるだろう。今後のPD研究においては、養育者との関わりで形成された不安定な愛着スタイルがカウンセリングを通してどのように修復されていくのかを明らかにしていく必要がある。

なお、本研究は平成29年度および30年度の大妻女子大学人間生活文化研究所大学院生研究助成(B)(課題番号DB2936, DB3033)(採択課題名: 代表的パーソナリティ障害の独自性とオーバーラップの背景要因の検討)より研究助成を受けているとともに、平成29年度の大妻女子大学生命科学研究の倫理審査委員会の承認(承認番号: 29-014, 29-015)を得て行われている。

主要参考文献

[1] James F. Masterson(2000), The Personality Disorders. Phoenix Arizona :Zeig, tucher & Co.INC. (佐藤美奈子・成田善弘(監訳)(2007). パーソナリティ障害 星和書店).